12月3日　ヨハネによる福音書７章２５～３１節
説教題：「この方こそ、本当のメシア」

今日の個所では、イエス様がメシアではない理由として「自分たちはあいつの素性を知っている」と主張する人々が出てきています。確かに、イエス様はクリスマスの夜にベツレヘムで生まれ、ガリラヤ地方のナザレという村で育ち、母親がマリアで父親がヨセフであると知られていました。しかし、メシアは突然にあらわれると信じられていたようです。ただ、メシアは旧約聖書でダビデ王の子孫として生まれることが預言されていましたから、彼らが信じていたのはただの迷信だったようです。

だからこそ、イエス様は人々に本当のことを教えることとなりました。その言葉は、「あなたは私たちのことを知っている」という言葉から始められました。それは、実際に文字通りにイエス様の素性を知っているという事であり、それと同時に「あなたは律法を通して私のことを知っているはずだ」という、痛烈な皮肉の意味も込められた言葉でもあったのです。彼らが律法を理解し、律法を正しく守るのであれば、本来イエス様を受け入れることができるはずなのだと、そういう意味でもイエス様は「あなたは私たちのことを知っている」と、人々に語り掛けるのです。神様を何よりもまず愛し、隣人を自分のように愛する、十戒に示されている掟を理解している時点で、イエス様のことを殺してしまおうとは思わないはずですし、ましてや十字架に付けようなどともしないはずです。

彼らユダヤ人たちは、誰よりも忠実に律法を守っている自負がありましたが、しかし律法を守ろうとすればするほど、行いによって、「自分の力によって自分を救うことができる」という思い上がりに陥ってしまっていたのです。だからこそ、イエス様は人々に対して「あなたたちはわたしのことを知っている」と言いながらも、「あなたたちはその方を、神のことを知らない」と、彼らの信仰がまったくもって間違いであることを指摘するのです。

今、私たちは、イエス様のことをよく知っています。群衆の中にはイエスを信じる者が大勢いて、「メシアが来られても、この人よりも多くのしるしをなさるだろうか」と言ったように、私たちもまたイエス様がメシアであると、キリストであると、そして私たちの王であると、よく知ることが出来ています。それは、イエス様がメシアでなければ実現することが出来ない様々な業を行ったからであり、神様の業を多くの人に見せ、自分もまた神様の業の実現として、十字架と復活を人々に示したからであります。その十字架を知ったからこそ、十字架にかかるいばらの冠を見上げて、子なる神でありながらいばらの冠を、血まみれの冠を私たちのためにかぶって下さった、私たちの王であるイエス様のことを知るのです。

私たちは、今日からアドベントという、クリスマスのその日を待ち望む季節を過ごすことになります。私たちに示されている愛と恵みとすべての導きを、多くの方と喜ぶことが出来るクリスマスの礼拝を、私たちは心待ちにして過ごしていきます。そして、礼拝の後には江刺保育園の子どもたちがページェントを行ってくれますから、その何とも微笑ましい光景が今から楽しみです。その光景を、今年こそはと待ち望みながら、このアドベントの日々を過ごしましょう。

今日の説教箇所：ヨハネによる福音書７章２５～３１節

・25:さて、エルサレムの人々の中には次のように言う者たちがいた。「これは、人々が殺そうとねらっている者ではないか。あんなに公然と話しているのに、何も言われない。議員たちは、この人がメシアだということを、本当に認めたのではなかろうか。しかし、わたしたちは、この人がどこの出身かを知っている。メシアが来られるときは、どこから来られるのか、だれも知らないはずだ。」すると、神殿の境内で教えていたイエスは、大声で言われた。「あなたたちはわたしのことを知っており、また、どこの出身かも知っている。わたしは自分勝手に来たのではない。わたしをお遣わしになった方は真実であるが、あなたたちはその方を知らない。わたしはその方を知っている。わたしはその方のもとから来た者であり、その方がわたしをお遣わしになったのである。」人々はイエスを捕らえようとしたが、手をかける者はいなかった。イエスの時はまだ来ていなかったからである。しかし、群衆の中にはイエスを信じる者が大勢いて、「メシアが来られても、この人よりも多くのしるしをなさるだろうか」と言った。